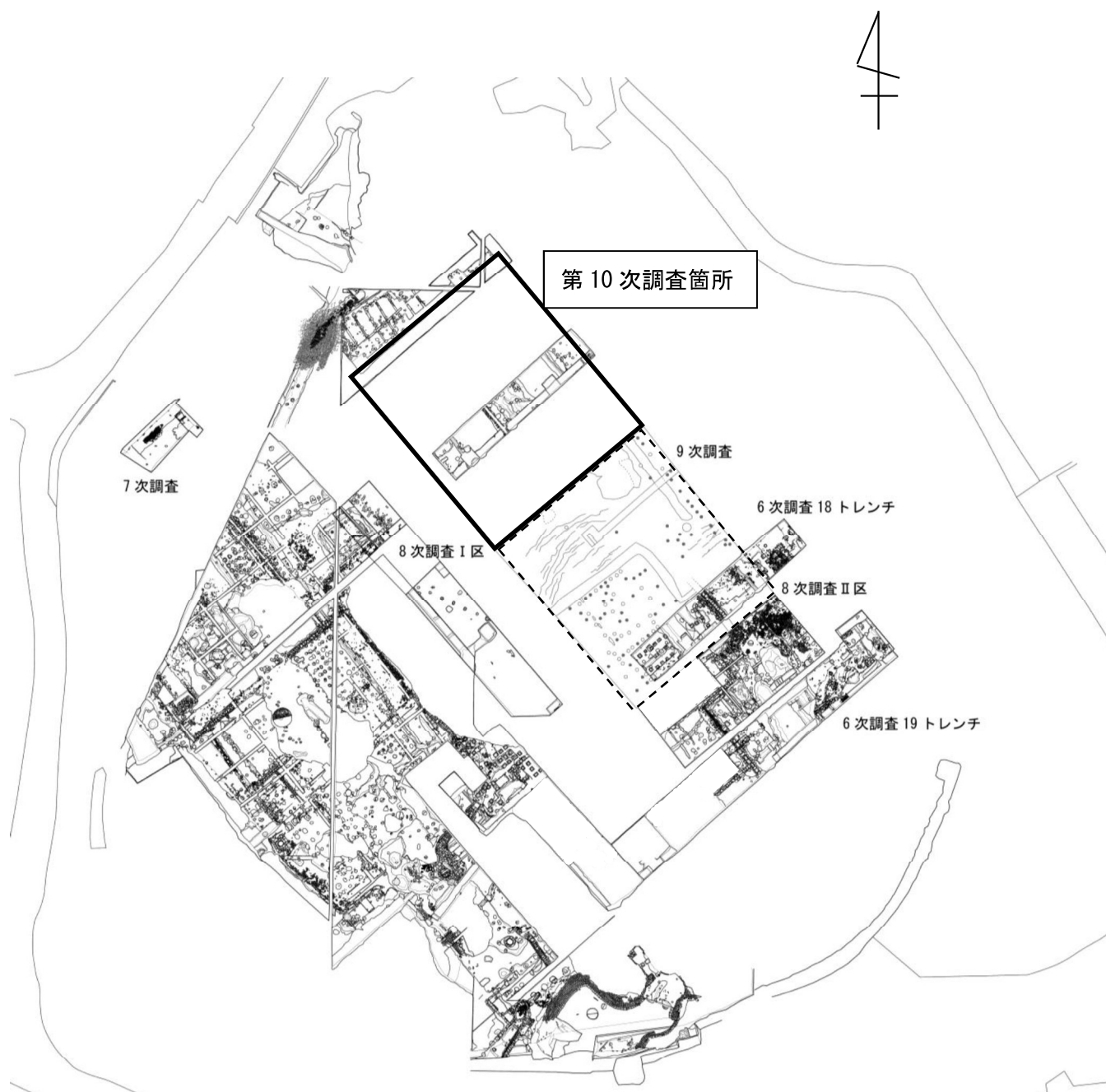




御用米曲輪 令和7年度第10次調査区位置図

(令和6年度現地説明会資料11「第5図 第2～6次調査の戦国期遺構・第7～9次遺構全体図」を改変)

令和6年度第3回部会にて決定した平場南側の整備案

「遺構が確認されている範囲と連続性が想定できる範囲での整備案」

【メリット】

- ・調査成果の中で連続性が想定できる範囲を復元的に整備することにより、遺構のみの表現と比較して当時の空間を分かりやすく表現することができる。

【デメリット】

- ・想定した範囲の根拠や判断基準の設定、説明に検討を要する。
- ・不明な箇所が中途半端に残る。



資料2



S=1:400

令和 6 年度第 3 回部会にて採用された個別遺構の整備案

項目	整備対象の課題	決定方針	メリット・デメリット	各遺構の整備案（詳細な検討は今後必要）	新たな課題
1. 石材を用いた遺構（石組水路・切石遺構・景石）	・整備後の来訪者の立ち入りをどのように考えるかで整備手法も変わってくる（レプリカの場合はGRCで行う、石材の場合は必要に応じてコンクリートで固定するなど）。 ・景石や護岸と異なり平坦地に一定の規格で展開されていることから、直接剥ぎ取りによるレプリカ作成でなくともよいと考えられるが、どの程度の再現性を求めるかが課題となる。 ・個別の景石の形状やモザイク状の不規則な配列など、どの程度の再現性を求めるかが課題となる。 ・景石は3D測量データから復元を行う。どの程度の再現性があるか検討する必要がある。 ・板碑は取り上げていることから、石材保存処理を行い実物を展示する。 ・抜き取り穴のみとなっている景石をどのように想定するか。	③石材やGRC・FRP等のレプリカを組み合わせて整備をする。	【メリット】 ・遺構を保存しながら、当時の景観を表現することができる。 ・石材とレプリカで遺構表現の差別化ができる（遺構が確認される所は石材、遺構が想定される所はレプリカ等）。 ・入手しやすい材料に合わせて整備することができる（安山岩は手に入り易いが、鎌倉石・風祭石に類似の石材も困難な場合など） 【デメリット】 ・異なる素材の組み合わせで整備を行った場合、経年劣化でメンテナンスを行う際に素材の違いを把握した上で修理を行う必要がある（どの部分が石材でどの部分がレプリカか、管理マニュアル等で整理する必要がある）。	12号石組水路：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる 13号石組水路：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる 14号石組水路：人頭大の円礫、風祭石2石→石材とレプリカを組み合わせる 15号石組水路：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる 16号石組水路：円礫で構築→石材を組み合わせる 17号石組水路：鎌倉石を中心に風祭石・安山岩（石塔部分）で構築→石材やレプリカを組み合わせる 18号石組水路：石材は、箱根火山に起因する安山岩の円礫及び風祭石と、鎌倉石。安山岩の灰白色、風祭石の黒色、鎌倉石の黄色という三種・三色の石材でモザイク模様を創出→石材とレプリカを組み合わせる 19号石組水路：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる 20号石組水路：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる ※16号礎石建物跡と共存しない 21号石組水路：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる 22・23号石組水路：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる 24号石組水路：自然石（写真図版より）底石に根府川石（板状節理）→石材を組み合わせる 25号石組水路：自然石（写真図版より）。石組の暗渠水路→石材を組み合わせる 3号石組遺構：風祭石・鎌倉石・根府川石・石塔部材（安山岩）等により組まれた石組遺構→石材とレプリカを組み合わせる 2号切石敷遺構：安山岩・風祭石→石材とレプリカを組み合わせる 3号切石敷遺構：安山岩・風祭石・鎌倉石→石材とレプリカを組み合わせる 4号切石敷遺構：鎌倉石の切石→レプリカを組み合わせる 5号石構遺構：安山岩の円礫（図版より）→石材を組み合わせる 6号石構遺構：風祭石の切石（図版より）→レプリカを組み合わせる 13号石列：自然石（写真図版より）→石材を組み合わせる	・15号、16号礎石建物跡等、建物下に石組水路や切石敷遺構が重なる部分の表現方法。 ・25号石組水路と9号掘立柱建物跡の重なる部分の表現方法。暗渠水路の表現方法。 ・3号切石敷遺構：石組水路が削平により失われた部分を補填する場合、庭園の切石敷遺構も同様に補填するか。 ・石組水路：表現する範囲（面積）をどこまでに留めるか。
2. 園池・護岸・州浜	・護岸が失われている部分、後世に園池が埋められた範囲をどのように解釈して整備するかが課題である。 ・護岸形状やモザイク状の不規則な配列など、どの程度の再現性を求めるかが課題である。 ・時期差のある遺構をどのように扱うかが課題である。 ・護岸は3D測量データから復元を行う。どの程度の再現性があるか検討する必要がある。 ・池水を入れて当時の景観を再現するか。 ・水を入れず枯山水のような形式として護岸の造形を表現するか。 ・適切な排水計画を行う必要がある。	③石材やGRC・FRP等のレプリカを組み合わせて整備する。	【メリット】 ・遺構を保存しながら、当時の景観を表現することができる。 ・石材とレプリカで遺構表現の差別化ができる（遺構が確認される所は石材、遺構が想定される所はレプリカ等）。 ・入手しやすい材料に合わせて整備することができる（安山岩は手に入り易いが、鎌倉石・風祭石に類似の石材も困難な場合など）。 【デメリット】 ・異なる素材の組み合わせで整備を行った場合、経年劣化でメンテナンスを行う際に素材の違いを把握した上で修理を行う必要がある（どの部分が石材でどの部分がレプリカか、管理マニュアル等で整理する必要がある）。	1号池：安山岩・風祭石・鎌倉石→石材とレプリカを組み合わせる 2号池：安山岩・風祭石・鎌倉石→石材とレプリカを組み合わせる	
3. 平場の整備について（玉石敷・砂利敷・舗装・張芝）	・玉石敷・砂利敷の整備範囲をどのように設定するかが課題となる。 ・整備に適した材料が十分に入手できるかどうか課題である。 ・玉石敷・砂利敷を自然な状態で敷設するか、維持管理を考慮して固定させるかどうか課題である。 ・玉石敷・砂利敷が確認（想定）されない範囲をどのように表現するかが課題である。 ・張芝や舗装の範囲は、江戸期の整備範囲との区別が課題である。	■玉石敷・砂利敷が確認（想定）されている範囲について ①自然な状態で敷設して整備する。	【メリット】 ・遺構で確認されている状況を再現することができる。 ・当時の景観に近づけて表現することができる 【デメリット】 ・質感はリアルだが飛散する等の維持管理上の課題がある。 ・同じ石材を入手できない可能性が高い。	4号玉石敷遺構 5号玉石敷遺構 6号玉石敷遺構 7号玉石敷遺構 8号玉石敷遺構 9号玉石敷遺構 砂利敷→自然な状態で敷設して整備する。	自然な状態で敷設して整備する。
		■玉石敷・砂利敷が確認（想定）されていない範囲 ①舗装で整備をする。 ■土系舗装	【メリット】 ・維持管理がしやすい。 ・広場として活用しやすい。 【デメリット】 ・現代的な雰囲気となるか。 ・舗装で表現しようとする施工上一定の範囲を定めなければならないが、どのように規定するか。 【土系舗装メリット】 ・景観として周囲との調和が図られる。 ・色合いを調整することができるため、現地に近い土の色を選択することができる。 【土系舗装デメリット】 ・メーカーによって強度にばらつきがあることから、試験施工を実施することが望ましい。 ・コンクリート系の舗装と比較すると劣化が早い。		

令和6年度第3回部会にて採用された個別遺構の整備案

項目	整備対象の課題	決定方針	メリット・デメリット	各遺構の整備案（詳細な検討は今後必要）	新たな課題
4. 土の遺構について（堀・溝・斜面（法面・山））	・堀は深さを1.0m程度に留めた立体的な表示とするか、平面表示とするか検討が必要である。 ・堀の排水機能を持たせる場合は、全体排水計画との調整が必要である。 ・溝は遺構の前後関係が不明であるため、調査や検討を要する。 ・溝は部分的であることからGRCで表現するか検討が必要である。 ・斜面上部は、必要に応じて排水設備を加える必要がある。 ・斜面の高さや勾配等の形状をどこまで復元検討できるかが課題となる。 ・斜面（法面・山）は庭園の借景としてどのように考えるかが課題となる。	■堀・溝について ①GRC・FRP等を用いてレプリカで立体的に整備をする。	【メリット】 ・発掘調査で確認された状態を表現することができる。 【デメリット】 ・破損した場合の維持管理等のメンテナンスが必要となる。 ・整備費が高い。	3号堀、4号・39号・41号・42号溝→GRC・FRP等を用いてレプリカで立体的に整備をする。	
		■斜面（法面・山）について ③盛土と張芝（または地被植栽）とともに、コンクリート構造物等を組み合わせて整備する。	【メリット】 ・構造物との組み合わせによって、土量の削減に繋がり、整備費を節約できる可能性がある（要検討） 【デメリット】 ・部分的に崩落等した場合に、コンクリート構造物が見えてきてしまう可能性がある。	南側法面一盛土と張芝（または地被植栽）とともに、コンクリート構造物等を組み合わせて整備する。	
		■斜面（法面・山）の植栽について ①植栽を行う。	【メリット】 ・広く一般の来訪者呼び込みやすい。 【デメリット】 ・植栽の維持管理が必要となる。 ・復元的な整備となるため、当時あったとされる植栽の中から具体的な樹種の選定・植栽配置の検討等が必要となる。	南側法面一植栽を行う。	
5. 礎石建物・掘立柱建物	・現地での整備では遺構の表現にとどまる場合であっても、AR・VR等の公開活用を考える場合は建物の検討が必要となる。 ・建物の大きさや構造については専門家と相談・検討が必要である。 ・発掘調査で確認されている礎石の精査が必要である。 ・9号掘立柱建物跡は、隣接部が未発掘地区であることから現在想定している建物規模よりも大きくなる可能性があり、確認が必要である。	礎石が確認されている箇所 の表現 ①石材を用いて表現する。	【メリット】 ・遺構で確認された状況を表現することができる。 ・礎石の存在が分かりやすく表現できる。 【デメリット】 ・維持管理が必要となる。 ・礎石に登って怪我や破損したり等、来訪者の安全管理上の課題に対応する必要がある。 ・自然石のため遺構の礎石と形状が異なる。	12号、13号、14号、15号、16号礎石建物跡 →礎石が確認されている箇所は、石材を用いて表現する。 礎石が確認されていない箇所は、表現しない。	・建物の柱間に乗らない礎石やビットを表現するか。表現することによって、建物の想定形状が分かりにくくなる可能性がある。 ・礎石建物跡もビットを表現するか。 ・狭間石（切石）はGRC・FRP等のレプリカで表現するか。 ・14号礎石建物跡：孫庇として表現するか、向拝として表現するか。 ・16号礎石建物跡：あがり縁まで表現するか。柱の並びに違いがあり、2部屋になると想定したが、表現するかどうか。
		礎石が確認されていない箇所 の表現 ③確認されていない箇所は表現しない。	【メリット】 ・遺構で確認された状況を表現することができる。 【デメリット】 ・表示として寂しい印象となるか。 ・建物の表示として分かりにくい。		
		掘立柱建物 柱穴の表現 ②平面的に表示する。	【メリット】 ・整備費用、維持管理のコストが抑えられる。 【デメリット】 ・来訪者が建物の柱の存在を認識しにくい。 ・柱表示も平面的に行う場合は表現が煩雑となるか。	9号・10号・12号掘立柱建物跡→柱穴を平面的に表示する。	
		柱の表現 ②平面的に表示する。	【メリット】 ・整備費用、維持管理のコストが抑えられる。 【デメリット】 ・来訪者が建物の柱の存在を認識しにくい。		
		共通 ①建物の範囲を表現する。	【メリット】 ・来訪者が建物の範囲を認識しやすい。 ・遺構では玉石や砂利がない空間となるため、整備として空間を作りやすい。 【デメリット】 ・遺構をそのまま展示するのではなく、建物規模に関する一定の復元検討が必要となる。		
6. 井戸	・6号井戸は内側の深さ設定をどのようにするかが課題である。 ・7号井戸は掘立柱の上屋の存在が確認されていることから、上屋の整備を行う場合に形状の検討が必要となる。 ・立体的に整備する場合は、入止め柵や柵内に格子状の転落防止網を設置することが望ましい。 ・レプリカの場合は、切石の不規則な配列など、どの程度の再現性を求めるかが課題となる。	■井戸遺構について ①石材・GRC・FRP等を用いてレプリカで立体的に整備をする。	【メリット】 ・発掘調査で確認された状態を表現することができる。 ・石材を使う場合は、実物の質感に近づけることができる。 ・レプリカで3Dデータを活用して整備する場合には、切石や井戸の積石の実物の形状を再現することができる可能性がある。 【デメリット】 ・現在ある3D測量のデータで大きさや形状の再現は可能だが、表面の細かいテクスチャは剥ぎ取りでの整備に及ばないことから、どの程度の仕上がりを目指すか検討が必要である。 ・同じ石材を入手できない可能性が高い。入手・代替可能な景石としては以下が挙げられる。安山岩→入手可能 風祭石→白河石を代替するか 鎌倉石→検討中	6号井戸：円礫、鎌倉石と風祭石の切石→石材・GRC・FRP等を用いてレプリカで立体的に整備をする。 7号井戸：自然石（写真図版より）→石材を用いてレプリカで立体的に整備をする。	
		■井戸柵について ①井戸柵は石材か、GRC・FRP等のレプリカを用いて立体的に整備する。	【メリット】 ・石材での整備は耐久性が高い。 ・井戸の表示と見学者の転落防止の機能を持たせることができる。 【デメリット】 ・井戸柵が遺構で確認されたものであると誤解を与える可能性がある。	7号井戸→掘立柱の上屋（10号掘立柱建物跡）をもつ。上屋は柱穴を平面的に表示する。	・見学ルートによって、井戸柵（安全柵として）は不要となるか。
7. かわらけ廃棄土坑	・来訪者の立ち入りを想定するかどうかで整備手法が異なる。	①GRC・FRP等を用いてレプリカで立体的に整備をする。	【メリット】 ・発掘調査で確認された状態を表現することができる。 【デメリット】 ・雨水や土砂等が溜まる可能性がある。 ・排水設備が詰まりやすくなってしまうため、定期的なメンテナンスが必要となる。 ・平面的な整備と比較して費用が高い。	かわらけ廃棄土坑→GRC・FRP等を用いてレプリカで立体的に整備をする。	・複数の土坑により構成されているため、表現する範囲（面積）をどこまでに留めるか。